図書紹介

竹内洋『学問の下流化』

中央公論新社、2008年。

赤　尾　勝　己

今から10年前の1999年、私は京都大学で「社会教育計画論」の非常勤講師を務めていた。ある晴れた春の金曜日の午後、京都大学教育学部棟内の廊下を歩いていたら、偶然にも竹内洋先生にお会いした。私が「関西大学の赤尾でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます」と名刺を差し出したら、竹内先生は「ああそうですか」と受け取って行ってしまわれた。その時「この先生はずいぶんと気難しい方なんだな」と思ったが、1996年1～3月に放映されたNHK人間大学『立身出世と日本人』を毎週のようにビデオをとって観ていた私にとって、竹内先生は「殿上人」のような存在であった。これが直接、竹内先生にお会いした最初であった。それから6年後に、竹内先生は私たちの教育学専修教授として赴任された。今では第一印象とはまったく異なるキャラクターでお付き合いをさせていただいている。まさかこのようなご縁があろうとは…、人生とはわからないものである。

本書は、竹内先生が2000年以降さまざまな新聞や雑誌で発表してこられた短い文章を集めて編まれたものである。構成は大きく全5章からなる。その間には9つの読書日記と、5つのコラムが置かれている。行間からは莫大な読書量が伺え、しかも簡潔にまとめられているので、読者にとっては格好の読書案内にもなっている。本稿では、全体の内容を紹介するのではなく、各章で私が印象に残った箇所を挙げて紹介してみたい。

第1章　学問の下流化

格差社会論がブームである。竹内先生はこのブームの隠された意図を見抜こうとしている。かつて、マスコミにおいて学歴社会批判が行われた際に、そうした論説が広まるにつれて「人々をして学歴社会を生き抜くための自衛に走らせた」のと同様に、「格差社会論も社会問題として論じられれば論じられるほど、エゴイスティックな行動に拍車をかけることになっている」として、「そもそもいまの社会を格差社会としてとらえるだけでよいのだろうか」(24頁）と疑問を投げかけている。これに対する答えは、「いまの社会は、格差社会としてよりも「不信社会」ととらえるべきではなかろうか」というものであり、「格差感社会の背後にある制度の正統性の喪失や人々の間の絆の崩壊による不信社会化をどう食い止め、どう再構築するか」(25頁)が課題であるとおっしゃる。そして、大竹文雄『日本の不平等』（日本経済新聞社、2005年）を参考にしながら「本書を読めば近年の格差拡大論ブームの仕掛けもうかびあがってくる。政治家や行政は解決すべき社会問題が、ジャーナリズムは危機を煽るトピックがほしい。これと学者たちの「世に受けたい」願望の共謀関係によるものではないかとさえおもえてくるのである。」(27頁）この答えをどう判断するかは、私たち個々人の社会観によろう。格差社会なのか格差感社会なのかを言うためには、日本社会において格差が強まったか否かについての何らかの量的データが示される必要があろう。

第２章　愛される知識人と嫌われる知識人

本章は、学生時代から一貫してリベラル保守の立場を貫いておられる先生の独壇場でもある。戦後民主主義が広めた保守＝悪＝遅れたもの、革新＝善＝進んだものといった紋切り型の言説からは距離を置いている。ここには右派の知識人を発掘して、日本の大衆意識の古層を掬い取ろうとしてきた研究の姿勢がうかがえる。それは竹内先生が３歳から18歳まで育った新潟県佐渡の両津が、右翼思想家であった北一輝の弟の北昤吉が政治家として活躍した土地でもあったからである。私も10歳から千葉県の君津～木更津という保守的な農村で育ったのでこの感覚はよくわかる。地元の人々に左翼的言説がまったく通じない農村社会で、私も青年期にずいぶんともどかしい思いをしたものである。私はそうした農村社会を見限ることになったが、竹内先生は、そのギャップを直視して保守的な思考様式がどこから由来しているのかを究明しようとしてきたのである。そのために昭和初期の右翼思想家である蓑田胸喜や、進歩主義者丸山眞男との対比で東大教授平泉澄が、さらには頭山満、佐藤優なども登場してくる。「学生の左傾化はなぜ終わったか」では「左翼は敗北・衰退したのではない。大衆的進歩主義的思想というひらがな「さよく」としてむしろ草の根レベルでは勝利したのである」（87頁）と述べられている。この分析を読者はどうみるだろうか。

第３章　大学の来し方、行く末

私としてはこの章が最も興味深く読めた。竹内先生は、道徳教育について、夏目漱石の「『坊ちゃん』が見抜いた教育界」として、「道徳教育が必要でないとか、教員に人格的模範性がなくともよいというのでない。いずれも、狸や赤シャツのような訓示や説教によって生まれるものではなく、染み出るように結果として伝達されるものである、といいたいのである」(147頁)とおっしゃる。2007年末に安倍内閣の教育再生会議第３次報告で、徳育を独立した教科とすることが提言されたことを受けて、「教育改革は、社会システム改革のごみ箱である。教育改革は大人の時代や社会への漠然とした不満を吸収する受け皿になりやすい」(153-４頁）として、「福田恆存の教育論に賛成しなくとも、大人たちの徳育重視の合唱が子どもをだしにしたものではないか、という自省ぐらいはあってもよいとおもわれるのである」(154頁）というくだりには、ナショナリズムから距離を置いたリベラルな立場がうかがえる。実は、2008年11月に高槻キャンパス高岳館で教育学専修３年次生を対象としたインターゼミ合宿で「道徳教育」を統一研究テーマとしたのは竹内先生のご提案によるものであった。ここで竹内ゼミの学生たちは道徳を教科にしていくことの不当性を主張していた。正論であろう。

第４章　在りし世の佇まい

本章では、「１変わりゆく学生文化～歴史の中の学生文化」が興味深い。ここでは
学生文化について、人生論的教養主義（古層)、人格的教養主義（中層)、政治主義的教養主義（新層）の三層が指摘されている。そして、若者のひきこもり現象などは今の時代のことだけではなく、時代を超えて繰り返されていると論じられる。

「ひきこもりやフリーターや自分探しは、近代日本の学生文化のなかで初めてのものなのだろうか。多少とも歴史的研究をしているわたしには、そうはみえない。むしろ既視感がある。近代日本の学生文化の古層と意外にも通底している、と。」(188頁)

ここで言う学生文化の古層とは、日露戦争後の煩悶青年、神経症青年である。彼らは積極的にどう生きるかを人生論的教養に求めた。ここには竹内先生の歴史社会学の知見が垣間見え

る。今日の日本社会では「自分探しというアイデンティティ・マニア現象が急速にひろがっていく。学生文化の背景をなす進歩と成長の歴史意識が崩壊し、個人化と脱制度化の進展によって学生文化の古層に似た学生文化が露呈してきたのである。」(191頁)

1905年に終わった日露戦争後の煩悶青年や神経症青年の出現と、2000年代の自分探し志向の臨床心理本ブームは、実は歴史を超えて深いレベルでつながっているとされるのである。これははたして学生文化の「古層」が露呈したものなのかどうか考えさせられる。

第5章　晩年の学問

私たちは研究者として生きていく過程で、他の研究者をさまざまに評価し、そして評価されていく。その際に、ある人がある研究者に入れ込んだために、それと異なる思想の研究者を批判することがままある。それが度をすぎた攻撃である場合、その人はどんな心理状況に置かれているのだろうか。それを読み解くうえで、本章では「感情をめぐる天秤棒」(247頁から)が面白い。攻撃的憎悪は、異質な他者に向かう場合と、同一人物に向かう場合がある。

「特定の党派やイデオロギーの信奉度が大きいほど、別の党派やイデオロギーへの憎しみが大きくなる。感情の天秤棒は、…同一人物や同一党派に時間がたってふりわけられるときもある。熱烈な愛を捧げた相手に対して時間がたつと、打って変わって憎しみの感情をいだく場合がある。この場合の憎しみの感情は、熱烈な愛をもったときの感情量に等しい。党派やイデオロギーに入れ込んだ者がのちに、離反する転向者の感情もこの法則に合致する。入れ込みの量と比例して憎悪の量が決定されるからである。」(248頁) これまで私は、某革新政党の熱心な党員だったある人物が除名されてから、異なる党派集団の親玉的存在になるケースを見てきた。その人は今でも尊大かつ権力的にふるまい周りの人々を抑圧している。このケースもそうなのだ。そうならないためには、「同一対象に対して相反する感情をいだくアンビバレンス(両面価値)こそまさに感情の天秤棒の大揺れをあらかじめ防御するものである。…不純物なしの尊敬や愛、信奉は美しい。しかし、メンテナンス・コストは意外と高くつきはしまいか。」(249頁)

さすが人生の達人である。私自身にも思い当たる節がある。「過剰適応」は危ないのだ。自戒したい。

読書日記7で、あるコンビニでたむろしている女子高校生3人に先んじて会計カウンターに品物を出したら、その女高生たちから「おやじー!」と怒られて、竹内先生が「ごめんなさい」と謝るくだりなどは、思わずその場での先生の表情まで思い浮かべてしまう。本書の随所には竹内先生の語り口から繰り出されるユーモアがちりばめられ、読者へのサービス精神に満ち溢れている。本書はどの章から読んでもおもしろい。本書は竹内ワールドの万華鏡(kaleidoscope)のような本である。本書で紹介された書物の中から1冊でも実際に手にとって読んでみる読者が出てくれば、竹内先生にとっても嬉しいことであろう。